

近世儒学者の時代区分論 渡辺 広

幕末・維新期の国学者の活動——とくに

明治維新における国学者の機能と関連

させて—— 芳賀 登

明治初期博覧会とその理念——旧筑摩県

下の博覧会を中心として——有賀 義人

〈日本民俗社会史研究〉

不具者崇拜の痕跡——インドと日本の比

較民俗—— 相葉 伸

民間巫俗の性格——巫女の口寄せと死霊

信仰—— 桜井徳太郎

日光修験の成立

尾張の祭雑考 熊谷 勉

両墓制の問題点について

兄弟分の民俗について 佐藤 米司

日本海沿岸移民史の考察——東北地方の

場合—— 北見 俊夫

物部氏について——ニギハヤヒノミコト

降臨神話を中心として—— 宇野 幸雄

平安初期における律令中央官制の質的変

化について——撰閣体制への移行の中

心として—— 大塚 徳郎

藤原実資の年中行事観について

鎌倉時代初期の守護と守護制度

宮城 栄昌

近世における地方寺領の経営——羽州慈

恩寺領の研究—— 伊豆田忠悦

近世浜名湖畔村の生態——入出村六帖網

を中心として—— 松井 秀次

寛政改革と旗本領 若林 淳之

「芝村騒動」覚書 本村 博一

幕末の農兵隊 小林 茂

幕末維新期における譜代譜西藩 小島 茂男

近代社会における立身出世主義について

福地 重孝

〔日本文化史研究〕A5判六〇八頁・年譜・

著作目録付・「日本民俗社会史研究」A5判

六七二頁・共に昭和四四年四月 弘文堂刊・

定価各三、八〇〇円 (熱田 公)

W・アーベントロート著

広田司朗・山口和男訳

ドイツ社会民主党小史

百年間にわたるドイツ社会民主党史を概

観したものである。著者はマルブルク大

学の政治学教授で、西ドイツのいわゆるニ

ュー・レフトの代表的な理論家として知ら

れている人物だ。こうした著者の立場は本

書の叙述の随処に顔を出して、日本語

にして二百ページ(本文)にも満たないこ

のドイツ社会民主党史の概説書をまことに

個性的なものにしている。

三月前期にまでさかのぼってドイツ労働

運動の始源に触れたのち、本格的な

概説の筆は、一八六三年のラサール派の組

織の設立からおこされている。そして叙述

の下限は、本書が発表された一九六〇年代

はじめの社会民主党の現状にまでおよんで

いる。しかし著者は、この間の百年の社会

民主党史をありきたりの均整のとれた概説

書の叙述方法でうわ撫でするのではなく、

著者が重要と考える問題ではかなり思い切

った寄り道もしているし、また、それに関

連して著者自身の立場を率直に表白するこ

ともはばかってはいない。この点では、た

とえばヴァイマル期の社会民主党の左翼反

対派や宗教的、社会主義的グループなどの

動きを扱った部分が、とりわけ注目にあた

いしよう。

全体として著者は、三月前期からエルフルト綱領の制定にいたる時期にドイツ社会民主党の好ましい伝統が形成されたと見てゐる。そしてその過程にかんしては、たんにマルクスやエンゲルスの役割を一方的に高く評価するのではなく、ラサールの果たした役割にたいしても肯定的な評価を惜しんではいない。またカウツキーについても、社会民主党におけるマルクス主義の公式化・物神化の責任をすべて無差別に彼に負わせる傾向に反対し、少なくともエルフルト綱領起草の段階でのカウツキーにはこの種の非難のあたらないことを説いている。

エルフルト綱領にあつては理論的部分と実践的部分とが弁証法的に統一されているとしてこれを高く評価する著者は、その後の歴史の中で、この綱領にもりこまれてゐる党の伝統がくりかえし侵害されてきたとべる。だが、著者は、エルフルト綱領以降の社会民主党の歴史をとめどのない墮落の過程としてまったく見離してしまつてゐるわけではけつしてない。もちろん、官僚

制による党機構の硬直化の指摘は忘れられていないし、また、一九一四年と一九三三年の「例題試験」に社会民主党が失敗したことへの責任もきびしく追及されている。しかし他方で、著者は、ヴァイマルやボンの民主主義の中にかつての社会民主党のよき伝統のはるかな作用をみとめてゐる。そして、現在の社会民主党についても、その現状をばげしく批判しながら、なお「社会主義社会のための闘争という放棄された偉大な伝統を復活させる」望みを棄ててはいないのである。

賛否は別として、著者の立場のよく滲み出た、問題提起的なユニークな党史であり、小冊子ではあるが一読にあたいしよう。

(B6判二四六頁 昭和四四年九月 ミネル

ヴァ書房刊 定価六八〇円)

(野田宣雄)

奈良県教育委員会編

藤原 宮

本書は奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二十五冊で、国道一六五号線檀原バイパスに伴う宮域調査の報告書である。本文

を第I章から第VI章にわけ、さらに付章として「遺跡・遺構の分類と標示方法」「藤原京域遺跡・遺物出土地一覧」「藤原京関係文献目録」「藤原京関係年表」を掲載している。巻末の、遺構遺物の実測図・写真が印刷が鮮明である。

第I章では、調査に至るまでの経過がのべられる。昭和四一年一月一日から四年五月三〇日までの第一次調査は道路建設費の一部を使用する、いわゆる原因者負担の発掘調査であり、道路開発側のペースでおこなわれたことを、本文と共に水田の畔を斜めに横切るトレンチの航空写真が、明確に示している。

第II章は研究史が中心である。戦前の日本古文化研究所の発掘調査と喜田貞吉・足立康の藤原京条坊の研究、戦前・戦後にわたる田村吉永の研究にふれている。

第III章では第一次調査から昭和四三年五月二〇日までの国庫補助事業による、二・三・四次調査の日誌を刻明に記載している。小活字で単調になりやすい日誌の中に「最初の木簡の発見」の文字をゴチックにし、